

知的障害特別支援学校における外国人児童生徒の 困難と支援

—教員のインタビュー調査を通して—

○楊 鈺倩 李 彩環 裴 虹 米田 宏樹
(筑波大学人間総合科学研究群) (筑波大学人間総合科学研究群) (筑波大学人間系) (筑波大学人間系)
KEY WORDS: 外国人児童生徒 困難 支援

1. 目的

文部科学省の「学校基本調査」によると、平成30年に日本の公立学校に在籍する外国人児童生徒数は93,133人で、平成20年からの10年間で約1万8千人増加した。これに伴い、外国人児童生徒に対する支援への関心が高まり、特に日本語力の問題に焦点が当てられている。しかし、障害のある外国人児童生徒とその関係者（保護者、教師など）は、障害を背景とした困難と、移住による環境変化や、文化の違いなど様々な状況によって生じる困難を抱えている。そのような困難に対して、適切な支援を行うために、障害のある外国人児童生徒が抱えている困難とそれへの支援に関する実態を把握する必要がある。そこで本研究では、知的障害特別支援学校に在籍する外国人児童生徒の困難と支援の実態を明らかにし、障害のある外国人児童生徒への適切な支援方法及び支援体制整備に必要な基礎資料を得ることを目的とした。

2. 方法

(1) 調査対象：知的障害特別支援学校における障害のある外国人児童生徒に関わりがある教師7名を対象とした。

(2) 調査方法：調査対象に対して、半構造化インタビューを行った。具体的には、個人属性3項目（年齢代、教育経験年数、関わった外国人児童生徒人数）、関わった外国人児童生徒の基本情報4項目（障害種類、学年、国籍、日本語力）について調査し、該当する外国人児童生徒の学習面と行動面での困難、教師が行っている支援、親とのやりとり、学校の支援方法や支援体制、今後実施して欲しい支援方法や支援体制について自由に語ってもらった。なお、インタビューの全過程をボイスレコーダー1台で録音した。

(3) データの分析方法：まず、インタビュー録音の逐語録を作成した。次に、質的データ分析ソフトウェアMAXQDA2020を用い、逐語録から「学習面の困難」、「行動面の困難」、「親とのやりとり」、「学校の支援方法や支援体制」、「今後実施して欲しい支援方法や支援体制」という5つの面に該当する内容を拾い出し、カテゴリ化した。最後、各カテゴリに分類されたコード数を集計した。本稿では、これら5つの面から「学習面の困難」と「行動面の困難」を取り上げて報告する。

3. 結果

(1) 障害のある外国人児童生徒の基本情報：調査対象として7名の教師が関わった外国人児童生徒は全部14名であったが、教師の覚える範囲で回答してもらったため、最終的に13名のデータをもたらした。13名のうち、小学部に4人、中学部に5人、高等部に2人であった。国籍について、フィリピン籍を有する外国人児童生徒が全部6人で、最も多かった。他には、ブラジル籍が3人、日本籍（日本人と外国人の親から生まれ、日本籍を有する者）が2人、韓国籍が1人、タイ籍が1人であった。

障害の種別について、知的障害が10人で、最も多かった。他には、自閉症が1人、重複障害（知的障害と自閉症）が1人、染色体異常が1人であった。

(2) 障害のある外国人児童生徒が抱えている困難と支援：学習面と行動面の困難と支援方法に該当する内容について分析し、その困難の結果の一部をTable 1に示した。

学習面について分析した結果、計67コードが拾い出された。さらに、それら67コードをカテゴリ化した結果、「読み書き」、「授業の参加」、「推理」、「聞き取り」、「計算」、「家庭での学習」などの項目が得られ、そのうち、「読み書き」に分類されたコード数が最も多かった。また、学習面の支援方法として、ホワイトボードや大きな文字など視覚的な支援や、絵と絵、または、絵と文字のマッチングに関する回答が最も多かった。ところが、「特に困っていない」という回答もみられた。この理由は、国籍に関わらず、日本語が話せる場合、知的障害から生じる困難への対応は、日本人児童生徒と同じ対応で可能であるからであった。ただし、児童生徒が日本語を話せる場合でも、保護者が、日本語ができないことにより、家庭との連携には困難があるとの回答が見られた。

行動面について分析した結果、計11コードが抽出された。さらに、それら11コードをカテゴリ化した結果、「コミュニケーション」、「不適応な問題行動」、「社会面」などの項目が得られた。そのうち、「コミュニケーション」が最も多かった。また、行動面の支援方法として、「簡単な言葉で丁寧に説明してあげる」などの回答がみられた。

このような学習面・行動面の困難に対して、学校が用いている支援方法や支援体制に関しては、「特にない」という回答が多く得られた。

Table 1 学習面と行動面の困難をカテゴリ化した結果

学習面の困難		行動面の困難	
カテゴリー	コード数	カテゴリー	コード数
読み書き	8 (21.62%)	コミュニケーション	5 (45.45%)
授業の参加	7 (18.92%)		
その他	6 (16.22%)	不適応な問題行動	4 (36.36%)
推理	5 (13.51%)		
聞き取り	5 (13.51%)	社会面	1 (9.09%)
計算	4 (10.81%)		
家庭での学習	2 (5.41%)	その他	1 (9.09%)

4. 考察

知的障害特別支援学校における外国人児童生徒は、行動面よりも、学習面で困難があると担任教師が評価していることが明らかになった。しかしながら、学習面では「読み書き」、行動面では「コミュニケーション」での困難が多く挙がっていることから、学習場面におけるコミュニケーションの困難、生活場面における「読み書き」から生じる困難のように、相互に関連した問題という視点での検討も必要であろう。また、知的障害特別支援学校では、全体的に視覚的情報による行動支援等が行われており、日本人・外国人を問わず、言語発達あるいは習得に課題がある児童生徒への支援方法が共通していることから、外国人児童生徒のみへの特別な支援方法が用いられていない可能性があると考えられた。

(文献)

文部科学省 (2019) 「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 (平成30年度)」の結果について。

(付記) 本研究はJSPS 科研費20K20807; 18H01037の助成を受けた。

(Yuqian YANG, Caihuan LI, Hong PEI, Hiroki YONEDA)